



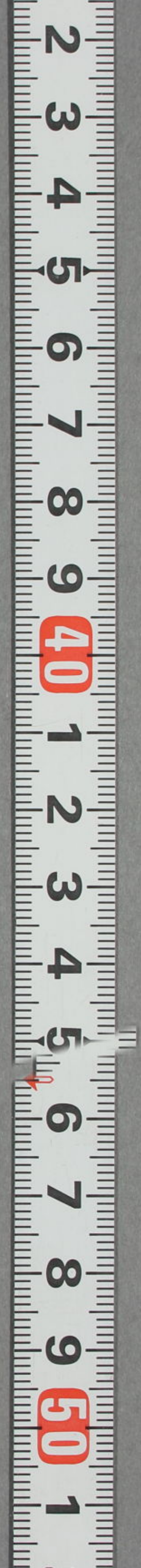
宗

北雪
美談
時代加々見

尺林堂
壽梓


五編上

非題曲の國産



為永春水作
 梅蝶樓因貞画
 若林堂文庫
 北雪美談時代鏡
 第五編上之卷

由縁之丞



安政三年辰五番葎市
 為永春水誌

聊先と出る

鏡の大きき顔首惚鏡と
 御見物の曇らぬ鏡で
 お吐く打粉を磨く古鏡も

身成次貞の見返らぬ作者の目見せぬ見返らぬ見返

淡く糸も長々と引伸鏡を為すも前後の起向の混乱

通へど硝子鏡の最薄は冊子やらの見せぬふ時代の人情世態を

何ぞこの表題と時代如く見と名号する如く見と鏡字訓



時代五

早渡少君



時代五

坂四郎少君

寺



大正
正方

後小
止方
愛
新根の方

甲
什
五



白
赤
頰
城

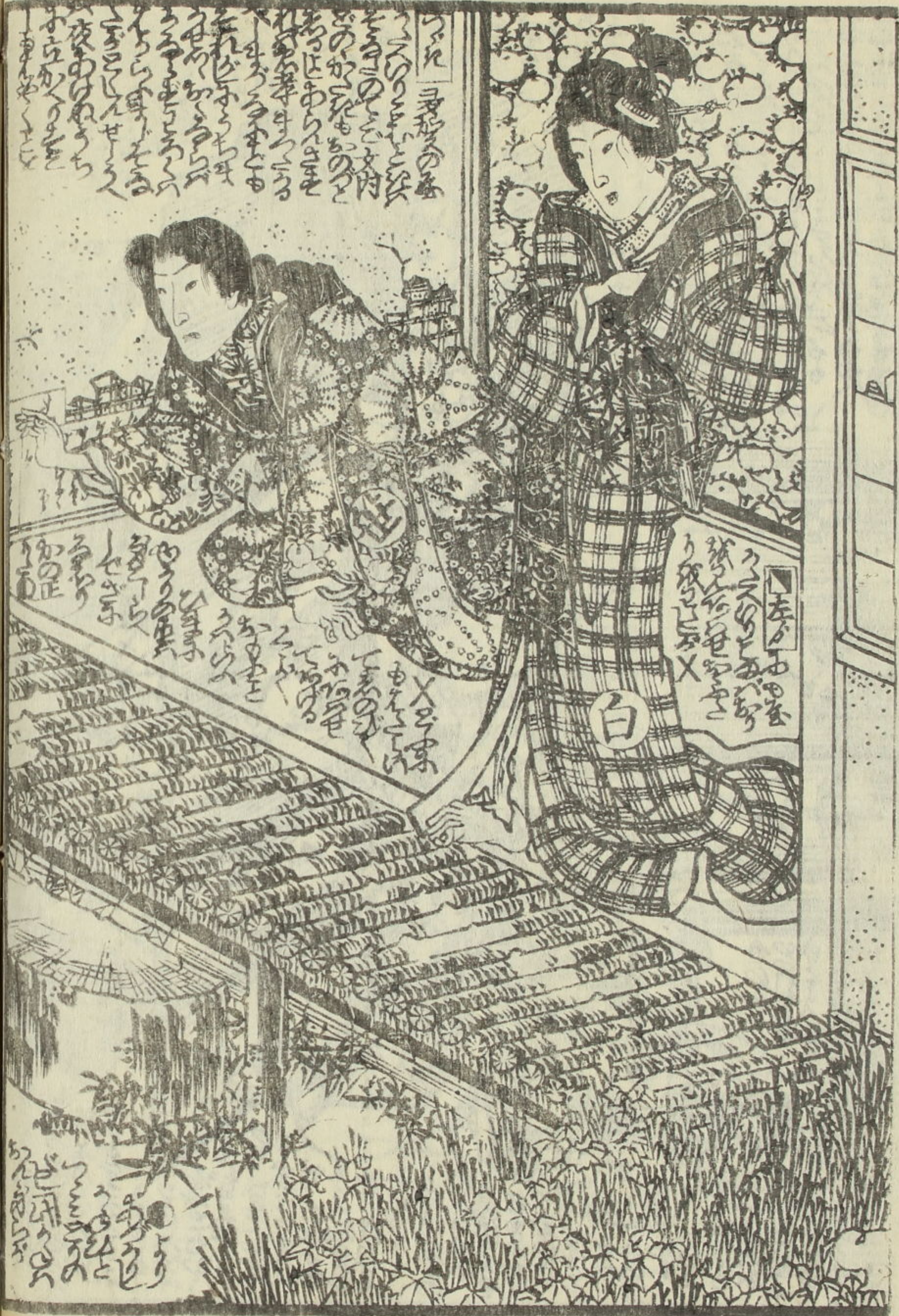
Handwritten text in vertical columns, likely a play script or commentary, surrounding the illustration on the right page.

Handwritten text in vertical columns, likely a play script or commentary, surrounding the illustration on the left page.





寺
八
五



時
代
五

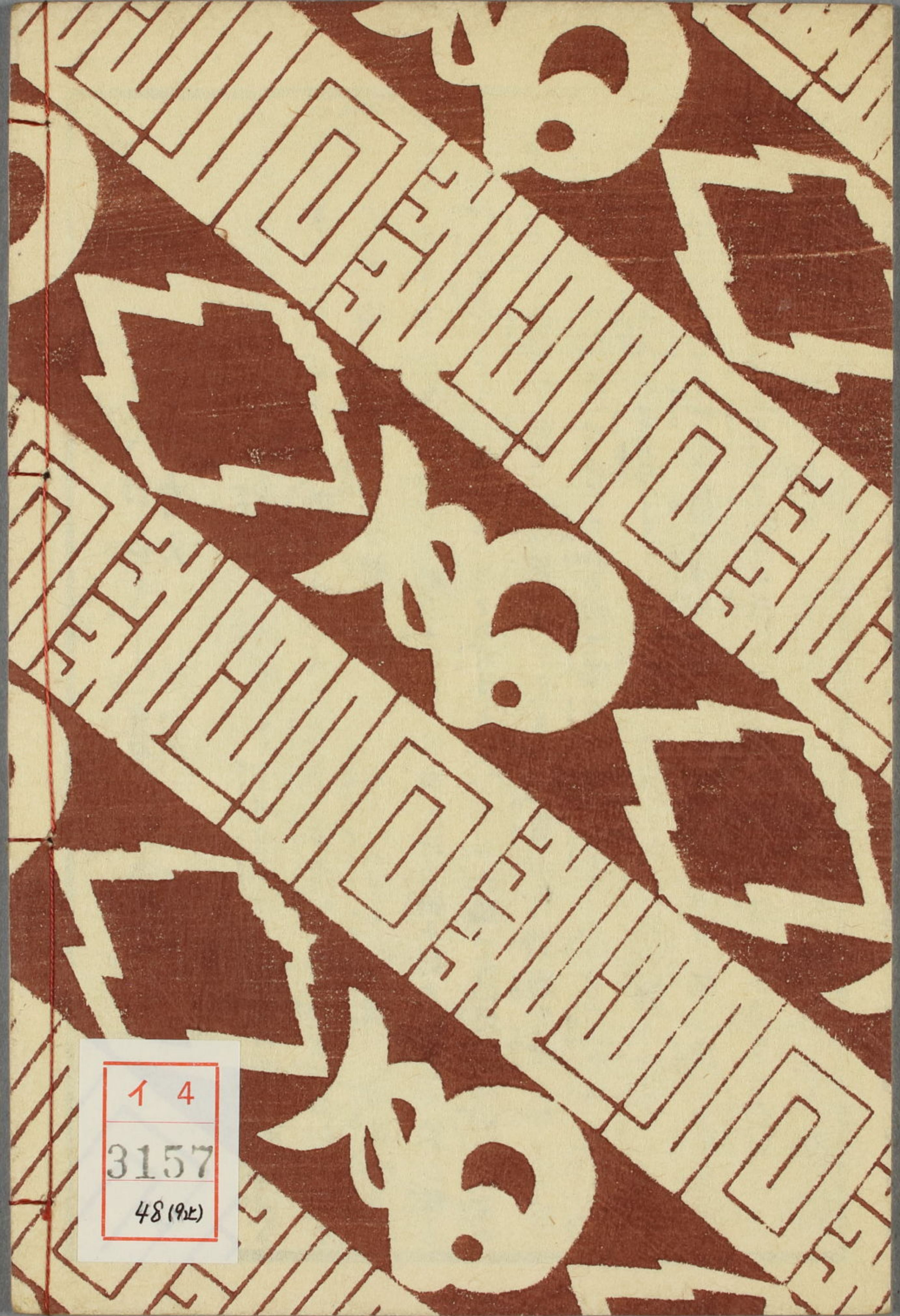


尾上之助が无失の災難爰ふといよ、春辰が草履をりて面を打のちむれを
 貫目とす 十八編へ前輯ふ漏るる緯を綴りあ、姑く話説大和ふ轉して彼荒地の遺子
 英壽丸と啗る、変生女子の形容と如う十六夜と假蹄、流竊ふ躬方を擔はん、心願と
 稱す攝待旅籠をたるとこれ一段爰ふ種々の可笑あるべし 十九編へその攝待ふ泊り或需め
 一老弱男女の器量と試を此段殊ふ巧まば豫胃中の機密を泄し、かぐて何ぞ
 へふ言の借 二十編へいづるの大和の段を編果る、屋囀る、閑る正香丹四郎が武名
 の傳記峰沢が花作と変名、くその妻阿十字と好悪の物語り、那无上大等が
 うふ及びびく又一入の見所あり、這の復長譚あるをりて 廿二編 廿三編小説二巻と夏もあ
 りねん、欽介、く後ふ再び多賀の話説ふうり、雪若が智勇の傳ふと引続き、く
 正覽ふ入るべしと謹む、白を

北雪 時代加賀見腹稿豫言 春水作
 美談 國貞画

十七編 因東坊戒念が計つて定ふ入るの一段續のく宝塔建立ありて朝日の弥陀を安置す
 す、く尾上之助が无失の災難爰ふといよ、春辰が草履をりて面を打のちむれを
 貫目とす 十八編へ前輯ふ漏るる緯を綴りあ、姑く話説大和ふ轉して彼荒地の遺子
 英壽丸と啗る、変生女子の形容と如う十六夜と假蹄、流竊ふ躬方を擔はん、心願と
 稱す攝待旅籠をたるとこれ一段爰ふ種々の可笑あるべし 十九編へその攝待ふ泊り或需め
 一老弱男女の器量と試を此段殊ふ巧まば豫胃中の機密を泄し、かぐて何ぞ
 へふ言の借 二十編へいづるの大和の段を編果る、屋囀る、閑る正香丹四郎が武名
 の傳記峰沢が花作と変名、くその妻阿十字と好悪の物語り、那无上大等が
 うふ及びびく又一入の見所あり、這の復長譚あるをりて 廿二編 廿三編小説二巻と夏もあ
 りねん、欽介、く後ふ再び多賀の話説ふうり、雪若が智勇の傳ふと引続き、く
 正覽ふ入るべしと謹む、白を

板元 若林堂



1 4
3157
48 (9L)



北雪美談



時代鏡

第五編

為永春水作

款川國貞画

若林堂梓



14
3157
48
(112)



14
3157
48 (112)